

観光地のバリアフリーの現状と課題ー高山市と岡崎市を比較ー

愛知学泉大学 廣永由香

岐阜県高山市ではバリアフリー都市として日本で第一歩を踏み出しています。高山市は現在高齢化率が約20パーセントと高く、観光客のためだけではなく市民のためのバリアフリー都市としても取り組んでいます。また、ここから市民と観光客との交流も深まり、温かみのある観光地が生まれているといえます。比較として岡崎市の現状と課題も調査し、誰もが楽しめる都市や観光地はどのようなものかを考えました。また、障害者だけでなく外国人観光客とのバリアの問題や、様々な障害に対応できる観光地が必要だと考えます。

はじめに

普段何事もなく旅行をして今の私たちは特に不自由もなくどこへでも行けてしまいます。しかし、おそどまさこ氏の『バリアフリースターは誰もが旅立てる環境を拓く』を読んで身体が不自由でも誰もが、旅行に行きたいという気持ちは変わらないということに気が付きました。すべての人の旅行促進にむけて概要版のアンケートによると、障害を持つ人の観光客数を把握していない都道府県が100パーセントでした。誰もが楽しめる旅行をするには、旅行先や観光地がバリアフリーになっていなければならないと思います。高齢社会にも入り、観光地のバリアフリーは重要なものになっていると考えます。

1. 高山市のバリアフリーの現状と課題

岐阜県高山市は400年前に整えられた町並みと、春と秋の高山祭が今も行なわれています。飛騨の伝統を受け継ぐ家具産業を中心とし、古い日本に焦点を当てたディスカバリージャパンキャンペーン以来、高山市は1970年当時に60万人ほどの観光入込客数が、2000年代に320万人となりました。

又、高山市内は現在20パーセント近い高齢化率であり、安全・安心・快適な環境作りを土野守市長が試みました。市民が住みやすく、観光客も来やすいことから、住みよい町は行きよい町というスローガンをたて福祉観光都市を生みだしています。障害者などの当事者を高山市に招き、障害者モニターツアーを実施し当事者からの問題提起や課題発掘をし、更に良い町づくりを試みています。ではどのような取り組みが行なわれているのか、また課題は何かを考えていきます。

高山市の観光地と言えば上三之町をはじめとする、古い町並みです。お店に入るまでの段差はなく、車いすでも安心して入ることができるようになっています。しかし、一部の店には厚い板がスロープになっていて入りにくいところがありました。古い町並みという景観を崩さずにバリアフリーに取り組む事は中々難しいように思います。

飛騨の里には、合掌造りの家など、飛騨地方を中心に各地方から移築された古い民家のたたずまいから、昔の人々の生活がわかります。ここは、平成8年にモニター旅行実施後園内をバリアフリー化しました。電動カーや車椅子の無料貸し出しもしています。しかし、入り口まで

のスロープが急な坂道であり、もう少し安全な道がないかと思います。

高山市内の道路状況。高山駅を中心に1キロ圏内を重点区域とし、改修をしています。車道面の高さをあげ、歩道とほぼ同じ高さにし、センターラインをなくし(写真1)道路脇に木を植える事で車のスピードの減少をさせています。側溝の蓋(グレーチング)を細い網目にし、ヒールや車いすの車輪がはまらないようにしています。しかし、車道と歩道の境目を無くすることで違法駐車をしている車も見ました。また、改修工事には多大なコストがかかるために、中々進まないのが現状のようです。



(写真1)

事業者向けに、『おもてなし365日』や『人にやさしいコミュニケーション365日』や『ふれあいの匠365日』の冊子(写真2)を配布しています。これは主に、事業者が障害者や高齢者に対してもてなしの仕方が書かれているものであり、観光客に対してもよりよいサービスを提供させるためのマニュアルのようなものです。外国人観光客のためのマニュアルもあり、高山市では外国人観光客との言葉のバリアなどに対しても真剣に取り組んでいます。ホームページには7ヶ国語搭載、(英語、中国語、韓国語、ドイツ語、フランス語、スペイン語、ポルトガル語)で、高山市が設置する観光案内看板は三ヶ国語(英語、中国語、韓国語)で表示されています。福祉協力校に訪問し車いす体験をしたり、福祉フェスティバルなども行ない、コミュニケーションの面でも取り組みが行なわれています。



(写真2)

またバリアフリー情報観光端末機(写真3)という、観光情報や画面の内容を手話で説明する機械が市内の5箇所に設置されています。これは、視覚障害者が利用できないという課題があります。



(写真3)

これらのことから、障害別で必要とするものは全く違うということが分かりました。高山市役所福祉課の鈴木氏がおっしゃったことですが、点字ブロックをつけたことで車いす利用者には、ガタガタな道になってしまうためにバリアになってしまうという中々難しい問題に直面していました。私の今までの考えは、点字ブロックがあればいいし、段差がなければいいという考えしかありませんでした。当事者の意見を取り入れることはいかに重要かが分かりました。今後のバリアフリーには光や音、センサー、無形のものとして心やコミュニケーションが必要とされてきていると考えます。

2. 岡崎市のバリアフリーの現状と課題

JR 岡崎駅。岡崎駅内は整備されており、エレベーター、エスカレーター付き。トイレも広く使いやすそうでした。駅の中には点字と音声で駅内を紹介する機械も付いており、とても好感を持ってました。

名鉄東岡崎駅。ここでは駅長をされている鈴木良治さんのお話を伺いました。東岡崎駅の私の印象としては、障害者や高齢者の方には利用しにくいと考えていました。駅側としてどう考えているのか、お話を伺いました。まずはエレベーターがないことに対して質問をしました。鈴木氏が言うには、エレベーターは付ける予定があるそうです。しかし、一機つけるのに三億円かかるというコストの問題が大きいということが分かりました。

また、名鉄の8駅この辺では新安城や豊田市、金山の駅でチェアメイト（写真4）という車いすに乗ったまま、階段を昇降する機械が配備されています。これを利用したい場合は前もって予約が必要だそうです。駅には従業員同士で、車いすが必要だと考え一台設置をしてあります。従業員のバリアフリーへの意識が高いことが分かりました。

駅ではどこにでもあることですが、電車とホームのすき間が埋まらないのは永遠の課題です。東岡崎駅のスロープ渡り板は駅長室においてあり、駅長同士で連絡をしあって用意をするそうです。電車の発着時間にも関わることで、大変だそうです。

エレベーターがないということで、車いす専用出口は駅構内にありました。専用の通路から改札を通らずに外に出て行くことができます。しかし、この通路は簡単に通り抜けてしまえる為に、「改札を通らない若者をよく目にする」とおっしゃっていました。点字の上に駐車をしないでくださいというような張り紙などがありますが、当たり前のルールを守れない人々が多いということを改めて実感しました。



（写真4）

<http://www.koutudo.com/syoukoukouki.htm> より

駅の現状として、9割の人達が障害者の手助けをしないそうです。手伝いをしようとする方は中年の方が多いようで力もないため、やはり若手が必要だということを実感しました。私たちが積極的に動いていかなければならないと思います。

岡崎公園周辺は、国道一号線で車どおりも多く、歩道橋を渡らなくてはなりません。歩道は整備されているのであれば、横断歩道の設置も大切なバリアフリーだと考えます。

岡崎市には観光地や観光資源も多い町です。地域活性化をするにもバリアフリー問題は大切であると考えます。更に良い町づくりがされることを期待します。

3. 今後の観光地のバリアフリー

今回の調査をして車椅子に乗っているから障害者だけでないことを忘れてはいけないことに気づきました。誰でも海外旅行で一度は言葉が通じなく、苦い思いをしたこともあるでしょう。これもバリアということです。更に、お腹の大きい妊婦や両手をふさぐ手荷物など。様々な障害があり、その中でも抱える問題が大きく違うのです。

周りの人も「してあげます」ではなく、「させていただきます」という心遣いやマナーを守る心が大切であると考えます。高山市ではバリアフリー都市として取り組んではいるものの、宣言書や条例などが出していません。これらのようなものを出し、市民の考えや周りの意識を更に高めることにより、もっと良い都市ができると考えます。

有形のものや目に見えるバリアフリーも大切ですが、無形のものである心のバリアや、コミュニケーションも大切だと思います。このようなことをふまえて市民と当事者、行政が一体になって作り上げる都市が、誰もが楽しめる観光地であると考えました。

そして私たち若者が、バリアフリー問題に対して今出来る事は何かを考えていかなければならないと実感しました。

○参考文献○

- ①一色清『観光学が分かる。』 朝日新聞社 2002.7.10
- ②社団法人日本観光協会『すべての人の旅行促進にむけて 概要版』 1995
- ③社団法人日本観光協会『すべての人の旅行促進にむけて』 1995
- ④佐野正『障害者旅行ハンドブック』 学苑社 1995.7.31
- ⑤山本誠『モニターが創ったバリアフリーのまち』 ぎょうせい 2003.10.20